

## 都市住民による都市と農業・農村との つながりづくり

調査研究部 阿部山 徹

### 1. はじめに

農林水産省が昨年4月に発表した「食品及び農業・農村に関する意識・意向調査<sup>1</sup>」の中に、「都市住民の農業・農村へのかかわり方についての意識」を聞いたものがある。その結果では、「地域農産物の積極的な購入等により、農業・農村を応援したい」という回答が85.3%と一番多かった。本誌111号で紹介した「セガレ（倅）」（以下セガレという）は、都市住民にとって、このような「地域農産物の積極的な購入等により、農業・農村を応援したい」活動のひとつであった。

本稿では、都市住民と農業・農村をつなぐ従来の活動とセガレの活動がどのように異なっていたのかを示し、次に、セガレを経験した都市住民が、セガレとは異なった形で農業・農村を応援する活動を始めていることを紹介する。その活動から今後の都市住民と農業・農村のつながりづくりの方向性を考察する。

### 2. 都市住民と農業・農村をつなぐ従来の活動とセガレの活動の違い

都市住民と農業・農村をつなぐ活動は従来より行われていた。しかしその活動の多くは行政が中心となり、本気で地域に定住したい、農業に参入したいという人を主な対象とするものであった。したがってこのような意識を持たない都市住民が農業・農村と関わりを持

ち活動する機会は、今までは極めて少なかったのである。

しかし、近年はその状況が変わりつつある。都市では農業・農村に興味を持つ人が増え、一方、農村では、従来、異質で交わることがないと思われていた人々どうしが交わり協働する活動も増えている。また、インターネットなどを通じて農業・農村の情報が多く提供されている。このような社会情勢の変化が進む中で、行政に頼らなくても農業・農村と関わることができる窓口も増えてきた。セガレはそのような窓口の中でも、都市住民が参加しやすく、相談しやすい窓口のひとつである。

### 3. セガレの活動

セガレとは、「農家を継がずに都市（東京）で働く農家の息子や娘が、たまたま始めたプロジェクト」である。この場合のプロジェクトは、「農家の息子や娘が持っている悩みや問題意識を解決するための企画」を意味する。セガレは、「都会でできる親孝行とは何か」を考え、月に1、2度であるが実家産農産物の販売を行う活動を始めた。今では、都市住民を対象とした農業体験ツアーの企画や出身地域の活性化にまでその活動範囲が広がっている。

このようにセガレは、様々な活動を積み重ねながら、都市住民が参加しやすく、相談しやすい農業・農村に関する窓口となった。そ

1 調査期間は、平成21年12月中旬。消費者モニター1,500人に対してアンケートを実施して、1,305人から回答を得た（回収率87.0%）。平成22年4月23日公表。

れを可能にしたのは、セガレの活動が都市に  
いながら始められ、身の丈に合った、ほどよ  
い情報を都市住民に提供したからである。ま  
た、親孝行という考えの下、集まった若者が  
助け合って活動することに多くの都市住民  
が共感を持ったからである。彼らの活動は、  
テレビ・雑誌・インターネットなど各種メデ  
ィアを通じて情報が発信され、広がった。セ  
ガレの活動開始以来、3年以上の月日が経っ  
た。今では農家の息子や娘だけでなく都市住  
民も含めて100人を超える仲間がセガレの活  
動に参加している。

#### 4. セガレから生まれた新しい活動 ～ファッピーズを一例として～

##### 1) 成立ち

セガレの主催した農業体験ツアーで知り合  
った7名の女性（内セガレのメンバー2名）  
が、「ファッピーズ（Fappys）」という農家  
を応援する活動を昨年新たに立ち上げた。フ  
ァッピーズの名前は、Farm-PR-Girlsの略に  
由来している。

この活動のきっかけは、セガレの主催した  
農業体験ツアーで、茨城の若手農業者集団で  
ある「カルティベート（Cultivate）<sup>2</sup>」のメ  
ンバーと知りあったことだった。彼女らは、  
カルティベートのメンバーと何度も触れ合う  
うちに、農業の素晴らしさに魅せられた。彼  
らを応援する活動が何かできないかと考え始  
めた。

彼女らは管理栄養士や野菜ソムリエなど食  
の資格を持ち、食べること、料理すること、

野菜が人一倍好きな仲間だった。そこで、彼  
女らはカルティベートのメンバーが作る野菜  
を使い、自分達でおいしい野菜料理を作り、  
それをみんなで食べることを思いついた。そ  
して、その料理を食べた人に幸せ（happy）  
なひとときを届けることを活動の目標にした  
のである。

##### 2) 「ベジフル トーク&ランチ」の開催

初めて開催した企画は、昨年12月に行った  
「ベジフル トーク&ランチ」というイベン  
トだった。そこでは、カルティベートのメン  
バーから直送された新鮮な野菜を料理し、約  
20人の都市住民にランチを提供した。また、  
料理に使用した野菜の生産農家を招き、都市  
住民と生産者が直接会話をする機会も作っ  
た。生産者がどんな思いで野菜を作っている  
のか紹介した。その中で、ファッピーズは自  
分達が得意とする料理や栄養・健康の面で、  
野菜の知識を紹介し、今、食べている野菜に  
更なる付加価値を加えた。

##### 3) 『『みそ作り体験と酒蔵&味噌蔵見学ツア ー』by茨城』の開催

この2月には茨城県石岡市で『『みそ作り体  
験と酒蔵&味噌蔵見学ツアー』by茨城』とい  
うイベントを開催した。約20名の都市住民が  
参加し、味噌づくり体験、酒蔵・味噌蔵の見  
学を行い、加工食品に関する知識を深めた。  
昼食はカルティベートのメンバーが生産した  
お米や野菜をファッピーズのメンバーが調理  
し参加者に提供した。また、昼食中には、地  
元の生産者と都市住民が交流し、お互い顔の  
見える関係を築こうとした。

2 カルティベートとは、茨城県石岡市で農業を営む鈴木泰幸氏を中心とした茨城県在住の20～30代の青年農業者の集  
い。2011年1月現在、約50名のメンバーが所属している。「地元茨城の活性化と農業イメージの一新」をコンセプト  
に各種農業イベントに参加したり、地域の農業体験の受け入れなどもおこなっている。

#### 4) 都市住民と農業・農村つなぐ新しい窓口の誕生

ファッピーズのイベントに参加している人の多くは、おいしいものが食べたい、野菜について知りたいという人々である。彼女らは、この活動を通してセガレとは異なった新たな層の人々の関心を引き、農業・農村の応援団の裾野を広げた。

このようにファッピーズは、セガレの活動から始め、自分達で新しい活動を考え、都市住民と農業・農村をつなぐ新しい窓口となった。彼女らは、自分達の活動を多くの人たちと共有したいと考え、仲間を増やすため、インターネット上でブログを使って情報を積極的に発信している。

### 5. 都市住民と農業・農村のつながりづくりの方向性

#### 1) 都市住民と農業・農村をつなぐ窓口の必要性

農業・農村に関わりたいという都市住民は増えている。しかし、農業を生業にしようとする意図は現段階の彼らにはない。このような都市住民にとっては、従来、関わりたいと思ってもそれを実現する機会が乏しかった。ところがセガレは、そんな彼らの思いに応えることができた。このような彼らの思いを容易に実現するセガレのような窓口は、今後とも必要かつ有効である。今後もセガレのように行政に頼らず自分自身のできることから始めるという動きは無視できない。

今、都市においては、このように自分自身のできることから始めて、農業・農村との関わりをつくるという動きが大切である。セガレの場合は農産物の販売から始めた。そして農業体験も行い、農業・農村に関する知識や経験を高めていった。この活動を通して、農家の息子や娘だけでなく、多くの多様な仲間が集まり、協力しあうようになった。今、彼らの活動の中には農村コミュニティに存在する「新たな共助・共存の仕組み<sup>3)</sup>」が働いている。セガレの活動で培われた知識や経験とこの共助・共存の仕組みが、ファッピーズのような新しい活動を生み出すことにもつながっている。

#### 2) 新しい活動を支える土台の役割

セガレは都市住民と農業・農村をつなぐ窓口としての役割から、新しい活動を支えるための土台の役割を担うようになってきている。

新しい活動はこの土台を活用する。土台があるおかげで、短期間で効率よく新しい活動をすることが可能になった。ファッピーズは、セガレの活動で得た知識や経験を活かし、自分達で新しい活動を始めた。このセガレでの経験を積み重ねたことによって、彼女らの持つ食の知識は、より都市住民にとって分かりやすく説得力のあるものとなったのである。

#### 3) 今後の都市住民と農業・農村のつながりづくりの方向性

ファッピーズの活動は、都市住民であってセガレやカルティバイトのような組織と連

3 「新たな共助・共存の仕組み」は、今の農村自身が直面する重要な課題であることを改めて付け加えておく。例えば、生源寺(2011)「寄稿 あらためて農業・農政のあり方を考える：経済連携問題に寄せて」P 4、図2参照。社団法人農協共済総合研究所ホームページより引用 ([http://www.nkri.or.jp/PDF/2010/kikou201101\\_shogenji.pdf](http://www.nkri.or.jp/PDF/2010/kikou201101_shogenji.pdf) 閲覧日2011. 2. 7)。

携することによって、農業・農村を応援する新しい活動ができるということを示した。

セガレの活動が月1、2回程度であるように、彼女らの活動も頻繁に行われるわけではない。しかし、都市住民が農業・農村と向き合い、自分にあった形で農業・農村と関わることは今後とも大切だ。そして、多くの情報が発信され、新たに農業・農村と関わりたいと思う都市住民や都市住民とのつながりを求める農家を刺激する。そのことによって都市住民と農業・農村とのつながりが強まり、新しい理解者や活動、そして意欲が生まれていくのである。

## 6. おわりに

本稿では、セガレの活動が、従来の都市住民と農業・農村とをつなぐ活動と異なり、都市住民が参加しやすい活動であったことを示した。また、セガレでの活動を通して知識や経験を高めた都市住民が、自分達の特技を生かし、セガレとは異なった形で農家を応援する活動を新たに始めたことを紹介した。その活動から今後の都市住民と農業・農村のつながりづくりの方向性を考察した。

本稿で紹介したセガレの児玉光史代表は、「セガレの概念を地方の中学生や高校生に広めたい。彼らが大学生となり上京してきた時に、地元の特産の野菜を東京でPRするという文化ができれば、日本にとって、すごく良いと思う」と語り、農産物を販売する活動を通して、農家出身の若者達が、都市住民と関わり農業・農村とのつながりをつくる活動を広げたいと考えている。

生源寺(2010)は、「農業に関心を寄せる若者が増えたからといって、そのまま農業に従

事する若者や農業関係の職に就く若者の増加につながるわけではない。それでよいのではないかと考えている。むしろ、普段は農業や農村と距離ある生活を送りながら、その人なりの農業観を持っている大人が増えることを歓迎したい」と、多くの大人が自分なりの農業観を持つことへ大きな期待を寄せている。今後とも都市住民が農業・農村の知識を深め、農業・農村を活性化させる活動につながることに期待したい。

次の課題としては、セガレやファッピーズのような都市で行われている農業・農村を応援する活動が、実際に農業・農村にどのような影響をもたらしているのかを研究していきたい。

## (参考文献)

- ・生源寺眞一(2010)『農業がわかると、社会のしくみが見えてくる～高校生からの食と農の経済学入門』(家の光協会)
- ・池上甲一(2010)「時代を超えて引き継ぐ文化としての農業・農村」『農業と経済』(2011年1・2月合併号)(昭和堂)
- ・農林水産省(2010)『平成22年度版 食料・農業・農村白書』(佐伯出版)
- ・阿部山徹(2010)「農家のセガレによる都市と農村の交流～農産物の販売からはじめる地域活性化～」『共済総研レポート』No. 111号
- ・「ファッピーズ (Fappys)」ブログ  
(<http://ameblo.jp/fappys/> 2011. 2. 7 閲覧)
- ・「カルティベート (Cultivate)」ホームページ  
(<http://www.cultivate-fj.com/> 2011. 2. 7 閲覧)